

草筆木筆で描く不思議のらんたち

草画帖 71



号



ネム号です。

ネムノキ。合歡木。ネブとも。

小枝、葉柄などを筆にします。

偶に花柄、実なども使います。

表紙は実で描きました。

地球照山に沈んで合歡の花

凡兆や能登の七尾の合歡の花



羅漢寺にあったネムの大樹が懐かしい。

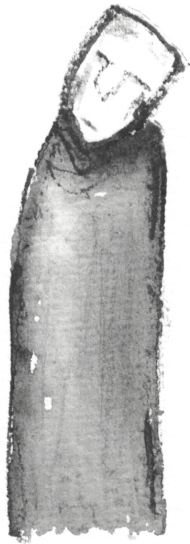


ネムの木陰で

旅のふうらの立睡術。ネムの木陰が夢見もいい。



マメ科の木と、マメ科の人と。



オクターブ上の世界で合歓の花

ねむ

たそがれて

よは

ねんねんころろ

あわい

まどろみ

ゆめの

しべ

ぺんねんねんねん

(はごろもは)

かんのんのん

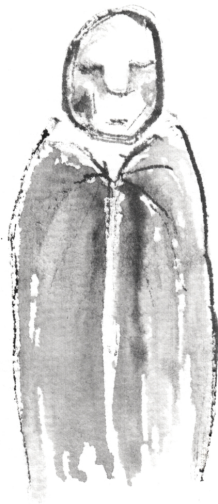
(ねむのはな)



象潟へ合歓の花を見に、俳枕の旅。



木が喋ればネム語はどんなだろう。



瞑想するもよし、眠りに落ちて夢を見るもよし。



きりきりと眠れる合歡に昂かげ 茅舎

ねむき
ねむき
ねむき

ネムノキは天界にも妖界にも生えているだろう。

草話

『奥の細道』で一番好きなのは象潟。

新暦の八月一日に象潟に着いて「雨も又奇也」とする暮景を眺め、翌二日朝（実際には夜）舟を潟に浮かべている。

「……松島は笑うが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。」

象潟や雨に西施がねぶの花 芭蕉

心を尽くした美麗な文の果にこの一句が据えられている。恰もこの句がそのまま一木の合歓となつて花を烟らせているかのである。

*

昔、夏に奥能登でよく野焼きをした。その行き帰りに合歓の街道と言つてもいいようなところを通る。車窓にうるむように咲くうす紅の花は案外目について旅情を切にした。ふうらにも懐かしい花である。

*

羅漢寺にも合歓の大木があつた。大きく広げた枝は羅漢たちの上にもかかり、エナガやメジロたちが枝移りし、イカルやシメがひっそりいたりした。

羅漢らが天を仰げば合歓の花 三樹彦

北条石仏を全集の表紙に配した写俳人・伊丹三樹彦の句。何百年も立ち尽くした石仏たちは、合歓の花に羽衣を見て、目を瞑ればどこかへ飛び立てるような夢想を楽しんだかもしれない。ただ、この合歓の木も今は無い。鳥も羅漢も寂しからう。



合歡の花

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第71号 2025年7月31日 泉井小太郎編集 六角文庫発行

〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008